

所与を越える道⁽¹⁾

—ジョン・ロックとベーコン主義—

田 村 均

1 はじめに

本論文の目標は、ジョン・ロックの観念説にまつわる或る誤解を解くことである。焦点になるのは、〈われわれの認識機能は感覚と内省の単純観念 (simple ideas) を越えられない〉という趣旨のロックの言葉の理解である。こういう趣旨の表現は『人間知性論 (*An Essay concerning Human Understanding*)』の中にときおり現れる。いわゆる感覚的所与である単純観念を〈越える／越えない〉といった言葉遣いに接すると、ともすれば、われわれは、〈観念から外的実在へどうやって達するか〉という問題が扱われているかのように思いがちである。本論文の主張は、ロックの単純観念の説に関してこの問題をあげつらうのは根本的に見当はずれだ、ということに尽きる。

以下では、まず2節で、解釈さるべきテキストの箇所を示し、3節で従来の解釈によればどう読めるのか、また、哲史的通念に基づくロック理解に従うと、どういう問題がロックに投影されてしまうのかを考える。4節で、ロックのテキストそのものを根拠にすれば問題の箇所がどう読めるのかを示す。そのあと、5節では、ロックのテキストを同時代の学問論の文脈に置き直して、本論文で提起される解釈の背景を明らかにする。最終的には、ロックが経験的知識を論じた部分は、同時代の学問上のイデオロギーであったベーコン主義の知識観⁽²⁾の表現として解釈するほうがよい、というロック解釈の方向を示唆する。⁽³⁾

2 ロックのテキスト

問題とするのは、典型的には以下のような表現である。

引用1 「雲を越えてそびえ天までも達する崇高な思考も、その起源と基盤とをここ〔印象を受け取るという人間知性の最初の能力〕に持っている。心がさまようあの広大な領域のどこにおいても、また、心が高められて達するあの高遠な思弁のどこにおいても、心は、感官ないし内省が呈示した観念を一步たりと越え出ることはない (it [the mind] stirs not one jot *beyond* those Ideas, which Sense or Reflection, have offered for its Contemplation)。2-1-24 ital. add.)⁽⁴⁾

引用2 「結論すると、感覚は不可入の延長した実体が存在することを確信させる。内省は、思考する実体が存在することを確信させる。経験はそういう存在者の実在を保証している。一方の実体は衝突によって物体を動かす能力を持ち、他方の実体は思考によって物体を動かす能力を持つ。このことは疑い得ない。繰り返して言うが、経験は、この両方の実体の明晰な観念をいついかなる時でもわれわれに供給している。しかし、これら固有の源泉から受け取られる観念を越えては (*beyond these ideas, as received from their proper Sources*), われわれの〔知的〕機能はとどかない。われわれがこれらの実体の本性、原因、様式をさらに探求しようとしても、延長の本性を思考の本性より明晰に知覚できるわけではない。……こういうことから、感覚と内省を通じて受け取られる単純観念がわれわれの思考の限界をなしているということは確からしいと私には思われる。この限界を越えては (*the Boundaries ... beyond which*), 心は、どんなに努力しようとも、一歩たりと進むことはできない。これらの観念の本性或隠れた原因を探ろうとしても、心は何の発見もできないのである。2-23-29 ital. add.]

これらの箇所は、つづめて言ってしまうと、〈われわれの認識機能は感覚と内省の単純観念を越えられない〉ということ述べていると見てよい。これらの箇所はどのように解釈できるのだろうか。

3 従来の解釈から

3・1 大槻春彦の訳注から

大槻春彦は、その『人間知性論』翻訳のなかで、引用1の箇所に訳注をほどこして次のように言っている。これは、私見では、典型的な誤解である。

「ロック哲学が主観的観念論である、あるいはすくなくともそれへの道を開くといわれるゆえんの、よく知られた文である。ヒュームにも同じ趣旨の似通った文がある。Cf. Hume, *Treatise*, I. 2. 6. [『人間知性論』岩波文庫版第1分冊 p. 271 注(四七)]」

主観的観念論という用語は古めかしいが、大槻の示唆したいことは、〈ロック的認識主観は、心への所与である単純観念のみを固有の直接的対象とするから、この直接的対象を《越えて心の外へ》達することは困難になる〉ということであろう。たぶん、多少の哲学史的常識を前提としても、このような理解の仕方は、不自然ではなく感じられるのではないか。しかし、のちに述べるように、これは引用箇所に現れている語句にロックが込めておいた意味のはっきりした取り違えである。

大槻は、上の訳注でヒュームに言及している。大槻が念頭に置いているのは、ほぼ間違いな

く次の箇所であると思われる。

「われわれの注意をできるかぎりわれわれの外へ向けてみよう。われわれの想像力を天界にまで、宇宙の究極の果てまで追って行こう。[だが] われわれは、ほんとうのところは一步も自分自身を越えて (*beyond ourselves*) 進んではないし、あの〔心という〕狭い領域に現れた知覚以外のどんな種類の存在も持ちはしないのである。[Hume [1739], pp. 67-68 ital. add.]」

この箇所の直前で、たしかにヒュームは外的存在 (*external existence*) の問題に言及しており、大槻の見るとおり、この箇所では心の中の諸表象を〈越えて心の外へ〉達することができないという趣旨のことを言っている。ところが、修辭に感じられる多少の類似とはうらはらに、ロックとヒュームは、じつは全く違うことを語っているのである。

3・2 ベネットの知覚ヴェイル説

これらの箇所に関する正しい解釈を呈示する前に、ロックの観念説についての従来からある解釈の一傾向を見ておく。いったい、認識主体が心の中の諸表象を〈越えて心の外へ〉達するという課題に関してロックの哲学は問題をはらんでいる、という理解は珍しいものではない。たとえば、ジョナサン・ベネットは、ロックの感覚と知識の理論の全体について次のような評を下した。

「ロックは客観的世界を、つまり「実在の物」の世界を、われわれの到達できない (*beyond our reach*) 知覚のヴェイルの向こう側に置いている。だから、私はロックの考えのこの側面を「知覚ヴェイル説」と名づける。[Jonathan Bennett [1971] p. 69] ital. add.]

これは、普通は知覚表象説と呼ばれるタイプの知覚論を、ベネットが特にロックに関して「知覚ヴェイル説」と名づけている一節である。ベネットは、明らかに、大槻が引用1に関して与えているのと同じロック理解を、ロック哲学全体に投影している。つまり、観念説を採用したことによって、ロックは認識主体が感覚的所与を〈越えて心の外へ〉達するということが不可能にしてしまった、ということである。

ただし、ここで特筆すべきことは、このような解釈の根拠となるべきロック自身の言葉をベネットがまったく引用してはいないことである。ベネットは、観念説の当然の帰結として、「知覚ヴェイル説」にロックが導かれると考えたとしか思われぬ。そして、たしかにロックに関する哲学史教科書的な通念はだいたいこのようなものであろう。知覚の直接的対象を心の

内なる観念であると規定すれば、ただちに、それでは観念から外的実在へどうやって達するのか、という問いが提起されざるを得ない、と広く考えられている。これについては第5節で回答を試みるが、これは17世紀後半イングランドの知識論の文脈を無視した考え方なのである。

従来の解釈者は、この問いを扱う場合、多く、原子論的な自然観や一次性質と二次性質とに関するロックの議論を手がかりとしてきた。ロックにおいては、原子(微粒子)の一次性質が、機械論的自然観によって導入される理論上の真実在である。すなわち、一般に一次性質は実在的である。よって、物体の一次性質を感覚することにおいて、たとえ微視的にではないにしても、外的世界の真実在のあり方を知ることが認識主体にでき、こうして諸表象を〈越えて心の外へ〉達するという課題が果たされる。従来の解釈の赴くところはこのあたりであろう。たとえば、モーリス・マンデルバウムは、次のように言っている。

「バークリーとヒュームによって提起されることになる挑戦に対してロックが十分な回答を与えていると主張することはできまい。しかし、ロックがその問題をすくなくともその概略は捉えていたこと、そしてそれに一つの解決法を与えようとしたこと、は否定できない。ロックの体系には〔解決法が欠けているのではなく〕別のものが欠けているのである。すなわち、人間の知識についての議論の全体を貫いている自らの原子論に関して、それを受容することの正当化の試みが欠けているのである。ロックがこの原子論という理論を正当化する必要があると感じたようには思われぬ。なぜなら、原子論は実験科学的探求から導かれる経験的基礎に立った結論である、とロックは見たからである。そして、このような見方は〔当時としては〕不自然なものではなかった。

Mandelbaum [1964], p. 60]

不完全ではあるがロックはともかく科学的実在論の立場を採った、とマンデルバウムは理解している。その前段階には、ロックの観念説は知覚ヴェイル説に陥り得るという通念がやはり横たわっている。「バークリーとヒュームによって提起されることになる挑戦」というのは、心の中の諸表象を〈越えて心の外へ〉どうやって達するか、という挑戦であるが、この挑戦を自らの問題としてロックは捉えていた、とマンデルバウムは主張しているからである。この挑戦に応える方法が、理論の受容の正当化を欠いた不完全な仕方ではあれ、科学的実在論を採るということだった、というのがマンデルバウムの解釈の趣旨である。

しかし、本当は、ロックの観念説が知覚ヴェイル説的な疑念——心の中の諸表象を〈越えて心の外へ〉どうやったら達しうるのか——を容れるものであるかどうかがかんも疑わしい。かりにもしも、このような疑念をロックがまったく念頭においていなかったとすると、このような疑念を解消するために科学的実在論をロックがとっている、という解釈の全体が根拠を失う。もちろんロックは微粒子説をさしあたって採用すべき有力な科学的仮説だと考えていた。

だが、知覚ヴェイル説的疑念を解消するための役割を与えるというようなかたちで、理論的実在としての微粒子を支持したのではなかった。以下で試みるのは、知覚ヴェイル説がロックの観念説に関して成り立つはずだという見通しそのものを根絶することである。⁽⁵⁾

4 ロックのテキストの解釈

4・1 引用1の解釈

まず結論から述べれば、引用1の箇所は、科学の方法論について述べているのであって、心の中の諸表象を〈越えて心の外へ〉どうやって到達するのか、という問題とは何の関係もない。このことは引用1に先立つ第2巻第1章の議論を見れば簡単に分かることである。

第2巻第1章第9節以下でロックはデカルト派の「魂は常に思考する」という教説を論駁することに取り掛かる。まず、われわれの経験に照らして考えてみれば、人間は熟睡している間は思考していると意識できない。これに対して、そうと意識はしていないが実は思考しているのだと反論するならば、さまざまな不合理がもたらされる。たとえば、熟睡中の思考が覚醒中の意識と独立別個であるなら、意識こそ同一人格を保証するものなのだから、熟睡中の思考は覚醒時とは別の人格に属することになり、結局、熟睡中と覚醒時とで同一人が別人格となってしまう、というような不合理がもたらされる(11, 12節)。ロックの論駁の筋道はこれ以外にも多岐にわたっているが、その根本にあるのは経験的証拠に突き合わせて考えるというやり方である。

ロックの考えでは、人間は常に思考しているがいつもそれに気づいているわけではない、などと言うのは実に奇妙な主張であって、こういうデタラメを主張するには、結局のところ、魂とはそういう存在なのだと定義するというやり方があるだけである。

引用3 「…魂とは常に思考する実体なのだを定義するだけで、仕事がやり遂げられる。……〔しかし〕私の知る限り、どんな学派のどんな定義も想定も、いつも変らない経験を打ち破るような力はない。そして、たぶん、この世界にあれほどたくさん役にも立たない議論と雑音とをもたらすのは、自分の知覚することを越えて (*beyond what we perceive*) 知りたいという欲望なのである。2-1-19 ital. add.]

引用1はこのような文脈に出現する。

引用1 「雲を越えてそびえ天までも達する崇高な思考も、その起源と基盤とをここ〔印象を受け取るという人間知性の最初の能力〕に持っている。心がさまようあの広大な領域のどこにおいても、また、心が高められて達するあの高遠な思弁のどこにおいても、心は、感官ないし内省が呈示した観念を一步たりと越え出ることはない (*it stirs*

not one jot *beyond* those Ideas)。2-1-24 ital. add.]

この第2巻第1章で争われているのは、個別的には、魂は常に思考するか、あるいは、思考が開始されるのはいつからか、という問題だった。議論は、ここから、哲学者が定義に基づいて経験的証拠を越えた主張をすることができるか、という学問の方法論一般に及んで行く。「自分の知覚することを越えて (*beyond* what we perceive) 知りたいという欲望 (引用3)」が斥けられる。それはすなわち、「心は、一步たりと、感官ないし内省が呈示した観念を越え出る (*beyond* those Ideas) ことはない (引用1)」からなのである。

ここから分かるように、引用1や3で、観念を〈越えて (*beyond*)〉という表現は、決して、心の中の諸表象を〈越えて心の外へ〉という問題をめぐって用いられているのではない。そうではなくて、感覚的経験の〈証拠を越えて〉思惟を進めることができるかどうか、という問題をめぐって用いられている。換言すれば、経験的証拠の〈確実性や明晰性を越えて〉知ることができるか、という問題をロックは扱っているのである。どんな高級な形而上学的思弁においても感覚や内省を通じて与えられる単純観念の〈確実性や明晰性を越えて〉は進めない、というのがロックの答である。

知覚ヴェイル説がもたらすような、知覚経験における外界への到達不可能性という問題は、ここでのロックの関心、すなわち単純観念の与える証拠の確実性を思惟において〈越え〉られるかどうかという問題と、全然無関係である。むしろ、哲学史的通念からの予想には反して、ロックは、知覚経験こそが外界について人間が知り得る最大の確実性と明晰性を伴っている、という主張を提出していると思われるべきである。

4・2 引用2の解釈

引用2もまったく同じ方向で解釈できる。むしろ、引用2は、単純観念の確実性こそが人間の認識機能の最大の確実性をあたえるという解釈の方向においてしか理解できない箇所である。つまり、知覚ヴェイル説的な発想をロックが持っているという想定のもとでは到底筋道だった解釈を与えられない箇所なのである。

第2巻第23章第29節(引用2)は、「結論すると、感覚は不可入の延長した実体が存在することを確信させる。内省は、思考する実体が存在することを確信させる。経験はそういう存在者の実在を保証している。」と述べることで記述が始まり、「こういうことから、感覚と内省を通じて受け取られる単純観念がわれわれの思考の限界をなしているということは確からしいと私には思われる。この限界を越えては (*the Boundaries ... beyond* which), 心は、どんなに努力しようとも、一步たりと進むことはできない。これらの観念の本性や隠れた原因を探ろうとしても、心は何の発見もできないのである」と締めくくられている。もしも、ロックが、単純観念を〈越えて心の外へ〉どうやったら到達できるのかという問題を扱っているのだとした

ら、この箇所はまったく混乱したことを述べていることになってしまう。感覚と内省によって実体の存在が確信されるのなら、すでに外界への到達という意味では単純観念を越えてしまっている。それなのに、単純観念という「限界を越えては、心は、どんなに努力しようとも、一歩たりと進むことはできない」と言うのだとしたら、ロックは支離滅裂なことを言っているとしか思われぬ。

そうではなくて、ここでロックは、単純観念の与える〈確実性や明晰性を越えて〉どこまでわれわれが実体の本性を把握できるか、という問題を考えているのである。引用2に先立つ箇所では、物質的実体と非物質的実体のそれぞれの本質的特性の理解可能性(intelligibility)が考察されている。ロックの考えでは、物質的実体の本質的特性である固体としての諸部分の凝集(cohesion of solid parts)という事実は、けっして非物質的実体の特性である思考という事実より分かりやすいわけではない。このそれぞれの実体についてわれわれが持っている経験は、固体性を持った対象の多数の知覚(感覚の単純観念)と、われわれ自身の中での思考の生起の多数の知覚(内省の単純観念)との二種類の経験だけである。何が固体の凝集性を成り立たせているか、何が魂の思考を成り立たせているか、という本性や原因の知覚は与えられていない。この意味において、物体についての所与である感覚の単純観念と思考経験についての所与である内省の単純観念とが「われわれの思考の限界をなしている」ということになる。実体の成り立ちの本性や原因については、単純観念以上に確実に明晰で信頼できる経験はないのである。だから、「この限界を越えては、心は、どんなに努力しようとも、一歩たりと進むことはできない」と断言されることになる。単純観念の与える証拠の確実性や明晰性を、存在者(実体)についてのよりいっそう確実に明晰な理解の方へ向かって乗り越えることができない、という趣旨である。

ロックが語っている「限界 "Boundaries"」とは、心と外的世界の間の境界のことではない。そうではなくて、ある個別の実体(対象)についての断片的だが真正の知覚経験と、実体一般の成り立ちについての普遍的で確実な認識との間に横たわっている境界である。実体一般についての普遍的で確実な認識とは、世界の存在者一般についての普遍的知識を意味するといつてよい。これは神が持つような認識のことである。引用2におけるロックの主張の骨子は、だから、人間には不可謬でありかつ普遍的な認識は持てない、ということにつきる。その意味で、確実性に関しては、個々の経験を通じて与えられる単純観念が人間の認識能力に固有の「限界」だ、ということなのである。知覚ヴェイル説が想定するような、知覚経験を通じての外界への到達不能性という問題は、ロックには無縁のものであるばかりか、むしろロックの意図に反している。

4・3 単純観念を〈越えて(beyond)〉という修辞の事例

以上、引用1, 2について、与えられた単純観念を〈越えて〉進むという言い方をしている

ときにロックが意図しているのは、〈単純観念の与える確実性や明晰性を《越えて》進む〉ということである事実を示した。上述の大槻の訳注がロックのこの意図を捉えそこなっていることは明かである。また、大槻が言及していたヒュームの言葉とロックが引用1で言っていることは全然趣旨が違ふこともすでに明かであろう。

一般に、ロックが〈単純観念を越えて…〉〈知覚を越えて…〉ということを行っているとき、そこで意図されているのは〈諸表象を越えて心の外へ行く〉ということではなく、〈知覚経験よりもすぐれた認識の方へ越えて行く〉ということである。この点を以下で示そう。単純観念を〈越えて (beyond) …〉という言葉遣いが現れる箇所⁽⁶⁾を幾つか挙げて検討することにする。

『人間知性論』と『知性論草稿A, B』のなかで、ロックが感覚への所与を〈越える〉という文脈で "beyond" という前置詞を使っている箇所は全部で27カ所ある。何をどう越えるのかという観点から、これらの箇所でのロックの意味するところを分類すると、以下の4つになる。なお*を付したものは重複して分類される箇所を示す。

(イ) 人間の認識能力を越えて進む、ということの意味するもの。たとえば、天使の持っている認識の方へ進む、というようなこと。16カ所、*Draft B p.132 [ただし、『知性論草稿A, B』の出典は、Locke [1990], Oxford 版全集のページ付けによる], Draft B p.211, *2-1-24, 2-17-1, 2-17-10, *2-21-73, 2-23-13, 2-23-28, *2-23-29, 2-23-32, 2-23-37, 3-11-23, 4-3-28, *4-6-14, *4-6-16, 4-12-7

(ロ) 単純な観念から複雑な観念へと進む、ということの意味するもの。たとえば、単純観念を材料にしてより複雑な観念を作り出すというようなこと。8カ所、Draft A p.8, *2-4-6, 2-12-2, 2-17-6, *2-21-73, 2-25-1, *4-6-16, 4-12-9

(ハ) 単純観念の備えている確実性や明晰性を越えてさらに進む、ということの意味するもの。たとえば、理論的・普遍的な認識の方へ進む、というようなこと。10カ所、Draft A p.31, Draft A p.61, *Draft B p.132, Draft B p.136, Draft B p.142, Draft B p.215, *2-1-24, *2-4-6, *2-23-29, *4-6-14,

(ニ) 心の外へ越え出る、ということの意味するもの。1カ所、*2-21-73

もちろんこれらは相互に排反な分類にはならない。たとえば、天使の持つ認識は人間の認識より複雑でありより確実であるのだから、(イ)(ロ)(ハ)のすべての側面で人間の限界を越えている。だから、一つの用例が重複していくつかの項目に現れることになる。それぞれの代

表的な箇所を示して、ロックの意図を考えてみる。まず一例だけ有る〈(二) 心の外へ越え出る〉という趣旨の箇所を見てみよう。

引用4 [(二) の例] 「われわれが心の中のただの観念を越えて行き (*beyond the bare Ideas in our Minds*), それらの観念の原因を探ろうとするときは, 感覚的事物の感覚不可能な〔微小〕部分の異なった大きさや, 形, 個数, 組織構造, 運動以外には, その事物の中であってわれわれに観念を産出するものを思い描くことはできない。2-21-73 ital. add.]

この引用4は, たしかに心の中の観念から心の外の事物へと越えて行くということが言われていると読むことができる。しかし, ロックは, 微粒子説の立場を積極的にとって, 心の外の事物は本性的に微粒子構造を持つと思われる, と述べているまでである。この箇所は, 同時に, 上で(ロ)にも重複して分類した通り, 所与からその因果的で理論的な説明へと向かうという文脈でも読むことができる。理論的な説明としての微粒子説による因果的説明は, 絶対的に真とは言い得ないから, 「…以外には…思い描くことはできない」という消極的な言い回しになっている。個々の知覚経験について懐疑を払拭できないからではない。したがって, 知覚ヴェイル説に伴うような疑念とは何の関わりもない。

次にもっとも多くの用例のある(イ)を見てみよう。

引用5 [(イ) の例] 「途方もないと思われるかも知れないが, 天使の持っている知識について, われわれは自分自身のうちに見いだすような知識のあり方に比較してあれこれの仕方では思い描くことができるだけである。……われわれは自分自身の思考より先へ進むことはできない。だから, 自分の感覚と内省から受け取った観念を越えて (*beyond the Ideas received from our own Sensation and Reflection*) 推測を広げていくことは不可能なのである。2-23-13 ital. add.]

この引用5に先立つ箇所の論点は, 人間以上の精神が持ち得る知識である。ロックは, 天使が持ち得る卓越した知覚能力を想定し, そういう卓越した知覚は人間が持っていてもまた役にたつだろうか, と問うている。答は, 人間はその環境に適した知覚能力を神によって賦与されているのだから, 天使のような鋭い知覚は役にたたないし, それを持っていないといって嘆くべきでない, というものである。引用5の言葉が現れるのは, 天使の能力についての想像が途方もないと思われるかもしれないという危惧に関してである。あきらかに, 引用5での弁明の趣旨は, 人間は人間の認識能力の限界である感覚と内省の単純観念を越えられない, というこ

とである。この場合、限界を越えたところに設定されているのは、もちろん外的世界などではなく、天使の認識能力と認識内容である。

続いて(ロ)の例を見てみる。

引用6 [(ロ)の例] 「観念を繰り返したり結び付けたりするこの機能において、心は感覚と内省によって供給されたものを越えて (*infinitely beyond what Sensation or Reflection furnished it [the mind] with*) 無限に思考の対象を変容させたり多数化したりする大きな能力を持っている。しかし、そうはいつでも、こういったすべての操作は心が観念のあの二つの源泉から得た単純観念に対してに限られる。単純観念がこうした構成の究極的な素材なのである。2-12-2 ital. add.]

この引用6では、単純観念を越えるということが、複雑観念を組み立てていくという趣旨になっている。このような言い回しは『草稿A, B』にも幾つか現れる。草稿A 8ページ, 61ページの用例などがそれである。問題になっている外的実在との関係について言えば、組み立てられた複雑観念の信頼性は、つねに組立の単位となっている単純観念に依存し、それらによって供給されると見なされる。この点は、観念の実在性を論じた『人間知性論』第2巻第30章第5節や、無知の原因を論じた第4巻第3章第23~26節などに明かであるが、『草稿A, B』の段階からロックが持っていた考えであって、たとえば、次のような表現がその例である。これは上の分類で言えば、(ハ)の例ということになる。

引用7 [(ハ)の例] 「特定の原因と結果が述定されている命題において、われわれは感覚の情報を越えた (*beyond the information of our senses*) 確実な知識を持たない。(Draft A, p.31) ital. add.]

引用8 [(ハ)の例] 「われわれの感覚の証言を越えて (*beyond the testimony of our senses*) 確実な知識を持つことのできる神の存在の知識以外には、……(Draft B, p.215) ital. add.]

引用7, 8は、感覚の証言こそ、外的実在についての知識の確実性の限界をなすということをはっきり示している。このことは、感覚が外界に到達できないということではさらさらなく、まったく逆に、われわれが到達できる限界は感覚の教えるところまでだということを意味している。

一方、単純観念がわれわれの理解力の限界をなしているということは、つぎのような箇所に

はっきり現れている。

引用9 [(ハ) の例] 「誰かがこの固体性とは何かと問うなら、私はその人に自分の感覚から教えてもらうように勧める。その人に、火打ち石とかフットボールとかを両手の間に持たせて、自分の両手を合わせるようにさせてみよう。そうすれば、その人は理解するだろう。……われわれの持っている単純観念は、経験がわれわれに〔思考や固体性や延長について〕教えるものである。かりに、経験を越えて (*beyond that* [such as experience teaches]), 言葉によって、単純観念をよりいっそう明晰にしようと努力しても、われわれは盲人の心の中の闇を語ることで晴らし、光と色の観念を説得してもたせるのと同じような失敗に終わるのである。2-4-6 ital. add.]

この引用9では、経験を越えるということが、言葉によって単純観念をさらに明晰にする試みとして捉えられている。言葉によってどんなに説明を加えてみても、直接の感覚的受容によって理解するより明晰に、固体性とは何か、思考とは何か、延長とは何か、運動とは何か、といったことが理解できるわけではない。したがって、単純観念は外界の基本的性質に関する理解の明晰性や信頼性の限界をなす。この考えは、すでに見た引用2にもはっきり現れていた。

以上の箇所から明らかなように、単純観念を越えられないとロックが言うときには、われわれの認識能力の限界を越えて、より確実に信頼性のある普遍的な知識の方へ越え出ることができない、ということをおうとしている。心の中の諸表象を越えて心の外へ達することができない、という懐疑論的な発想ではない。複雑に構成された思念や言葉による定義が、単純観念の明瞭な情報を越えないということ、あるいは、単純観念が人間の理解力の限界をなしているということ、こういったことが、まさしく引用1、2の箇所でもロックが述べていたことである。しかし、後世のわれわれにはバークリーの観念論的な現象主義の試みやデカルトの方法的懐疑などが哲学的常識として与えられているために、引用1、2のような箇所を読むとき、同時代の読み手にはたぶん自明であったようなロックの意図が、かえって非常に見えにくくなってしまっているのである。

というのも、言葉ではなく経験の教えるところに目を向けよという主張は、ロック独自のものなどではなく、ロックをその一メンバーとするロンドン王立協会 (The Royal Society of London) の実験主義の科学活動を導いていた立場であった⁽⁷⁾。人間は単純観念を越えられないというロックの言葉は、このような同時代の知識論上の立場を背景として見られるべきである。観念説一般に関する哲学的通念はかえって現代の読者の邪魔になる可能性が高い。

以下では、17世紀イングランドにおけるロック以外の人々の〈言葉ではなく経験につけ〉という主張を、引用を通じて簡単に見ていく。ロックが、言葉に対比されるべきものとして単純観念を挙げるところに、他の人々は実験 (experiment) 観察 (observation) 作業・仕事

(works, labour) といった活動を置く。感覚的所与を示す単純観念というロックの術語は、思想を同じくする同時代の他の人々の言い方を使えば、〈実験や作業によって供給され生産される《知識体験の内容》〉を表現すると見てよい。「単純観念」を、外界から原理的に切り離されて心の中に映し出された単なる表象と見なすことは、知識に関わる同時代の動向からみれば多分にまとはずれなのである。⁽⁸⁾

5 ロックと17世紀イングランドの実験科学の運動

5.1 ピューリタン革命期と王政復古期の科学

1600年に刊行されたギルバートの『磁石論』以降、17世紀イングランドの科学活動を一貫して特徴づけているのは、スコラ的な言葉の学問への嫌悪と実利的で実験的な学問の賞賛である⁽⁹⁾。ベーコンを先達として称揚するこの傾向が特にはっきり現れてくるのは、ピューリタン革命期であり、なかんづく教育カリキュラムの変革の主張としてピューリタンの思想家によって打ち出された⁽¹⁰⁾。言葉を扱うのではなく実験と観察の作業において事物そのものを扱うべきこと、そしてその実験と観察は人間に役にたつものを作り出すためにあること、こういったピューリタンの考え方は、とりわけピューリタンのというわけではなかったウィリアム・ペティのような人の言葉からも十分うかがえる。

引用10 「学者や理屈好みの人々は、知的能力を使う多くの立派な問題を持っているだろう。だが、今のところ、彼らはたんなる言葉や途方もない思念について不思議がったり苦しんだりしているだけである。彼らも、自分の能力を示して名誉を得るだけでなく、実利のある技芸 (Arts) を発明して利益を得るようになるならば、もっと明敏に思考するようになるだろう。詭弁的論法は、まともな判断力がその無価値さを暴き、それを真理から区別するようになれば、今までのような尊敬を受けることはあるまい。

(William Petty, The Advice of W. P. to Mr. Samuel Hartlib, for Advancement of some Particular Parts of Learning [1648], in Jones [1982] p. 92)」

ピューリタン期の思想傾向は、共和派のベーコン主義者の意図的な無視というかたちで政治的には注意深くひねりを加えながら、王政復古期にも受け継がれる。『マイクログラフィア 序文』で「学問を言葉から活動へ移していくこと (bring philosophy from words to action)」を「よい兆し」であると述べたロバート・フックの期待は、1662年に王の設立認許状を得てロンドン王立協会に集まった学者達の期待でもあった。そのことは1667年に刊行された王立協会の一種の公式声明であるスプラットの『ロンドン王立協会の歴史』を一読すればきわめて明瞭である。

引用11 「今までに述べたことから、実験哲学 (The Experimental Philosophy) は、人々を実地の仕事 (works) に向かわせるという点で、彼らが思考を論争 (disputes) に費やすのを妨げると考えてよいだろう。……一方の〔市民生活において熟慮する〕人は、決して空しく熟慮しているのではなく、行動する意図を持って熟慮する。他方の〔学問において熟慮する人、すなわち実験家〕人も、自分の探求において同じように振る舞う。こういう熟慮の人は、事物を公正に厳密に注意深く調べて観察を積み重ねるけれども、決してそれらを怠惰に放置しておくのではなく、行動を導くためにそれを使い、そうやって人々に必要なものを供給するのである。(Sprat [1667] p. 341-2)」

引用11では、王立協会の立場が、言葉上の論争に時間を費やすのではなく、実験・観察の作業や活動に向かおうとするものであること、科学者は熟慮の上で行動する人間として描き出されていること、こういったことが浮かび上がっている。ロンドン王立協会の持っていた自己イメージの中では、科学者は、実生活で熟慮し行動する市民と同じように、学問という領域で熟慮し行動する人なのである。独断を避けて熟慮し、怠惰を嫌って行動する実験家は、独断論者とも懐疑論者とも距離をおく。

引用12 「彼ら〔ロンドン王立協会の人々〕は、事物の一般的一致点 (the general agreements of things) についてはあまり考察しない。彼らは、個々のもの (the particulars) について考察する。というのも、一般的一致点は個々のものからいずれ導き出されるからである。彼らは、したがって、もっとも偉大な独断的理論家と同じぐらい懐疑論者からは隔たっている。懐疑論者は独断的理論 (Doctrines) も実地作業 (Works) も両方ともしりぞける。独断的理論家とはといえば、実地作業には十分な尊敬を払わずに、独断的理論を結論している。(Sprat, op. cit. p. 107)」

この引用12では、個々のものから始めるという帰納主義の立場と、理論は棚上げして、まずはともかく実地の観察と実験とによって知識を増やして行くという実験主義の立場との二つが、懐疑論にも独断論にも陥らない中庸に行く賢明な姿勢として描き出されている。ただし、ここで注意すべき事は、スプラットはじめロンドン王立協会の人々は、実験的探求に仮説や理論が必要不可欠であることを十分よく知っていたことである⁽¹¹⁾。理論や仮説から独断的な断定を導かず、理論の真理性については判断停止しておいて、それを実験的に確かめていく、というきわめてまっとうな実験科学的探求を、懐疑家と独断家の中間を行く道として称揚している。

引用13 「これらの言葉〔「できそうにない」「不可能」〕は、弱い精神には恐ろしい言葉である。だが、勤勉で賢明な人たちは、これらの言葉が怠惰や無知の言い訳にすぎな

いと分かっている。大体において、困難は事物自身の中にあるのではなく、事物についての間違った意見 (opinions) の中にある。困難は意見によって持ち出されるが、実地作業 (works) によってすぐに打ち消される。人の精神 (minds) にとって初めはありそうもないとされたことも、多く、人の目 (eyes) で観察すればそうではない。思考にとっては (thoughts) 実行不能な事も、手 (hands) においては実行不能ではない。むき出しの手では難しすぎる事でも、道具によって強化され、方法によって導かれれば、同じ手でやってのけられる。数人の手と少しの道具ではできない事でも、多数の力を協同させれば容易である。ある時代にはできない事でも、後の時代の新しいやり方でならきっとできるのである。(Sprat, op. cit. p.194)』

引用13で語られているのは、実地経験の重視、装置の考案、科学者の協同作業といったやり方で、学問上の困難を乗り越えることができるという楽観的な見通しである。これがロンドン王立協会のベーコン主義的科学の見通しだった。〈大事なのは、言葉ではなく実験活動である〉という科学的活動に関するベーコン主義イデオロギーは、以上見たように、17世紀を通じてイングランドで強く主張されたものであった。

ロックは、このような思想的動向の中でみずからの知識論を組み立てていた。彼は、1671年に『人間知性論』の草稿AおよびBを書いており、最終稿の出版は1689年である。一方、彼は、1668年11月26日にロンドン王立協会のメンバーに選ばれている。1669年と1671年には評議員 (council) を務め、1698年までは会員名簿に名前が記載されている。協会におけるロックの活動状況は、70年代初めと90年代終わりにある程度活動的だったと言われている⁽¹²⁾。つまり、ロックは『人間知性論』執筆期間を通じてロンドン王立協会の学問上の立場や活動の実態に通じていたと考えてよい。特に協会の主要メンバーで時代を代表するベーコン主義科学者であったロバート・ボイルとの影響関係は、これまでもしばしば指摘されてきた。以上に引用したスプラットの著作はロックの蔵書目録にも見いだされる⁽¹³⁾。単純観念についてのロックの主張も、このような歴史的文脈の中において読まれるべきなのである。

5・2 ロックの単純観念と17世紀イングランドの知識論

すでに見たように、ロックは、言葉上の説明や定義でもって単純観念の与える情報を〈越える〉ことは出来ないと言っていた。単純観念という人間的限界を越えたところには、天使的な認識があるのかもしれないが、人間が単純観念を〈越え〉ようとすると、結局のところその努力は、単純観念を複雑に組み合わせて言葉を使って説明していくことになってしまう。〈複雑観念と単純観念〉〈言葉と単純観念〉という対比がロックにはあって、信頼性がより高いのはつねに単純観念の方なのであった。

一方、以上の引用10～13に共通しているのは、〈言葉と実験〉という対比の構図である。退

けられるべきものとして、言葉 (words)、論争 (disputes)、意見 (opinions)、独断的理論 (doctrines)、思考 (thoughts) がある。他方、推進されるべきものとして、実験哲学 (experimental philosophy)、作業 (works)、行動 (action)、個々の物 (particulars)、手 (hands)、目 (eyes) などがある。

このような対比図式の中で、ロックの〈単純観念〉は、〈目や手による知識〉の位置、つまり、同時代の他の人々が〈実験〉や〈作業〉と呼ぶ項目に与えられていた場所を占めている。言葉ではなく単純観念に基づくべきだとロックが言っているときに、われわれがそこに読み込まなければいけないのは、言葉をもてあそぶのはやめて現実の実験や観察という知識の生産活動につけ、というロンドン王立協会のメンバー共通の主張である⁽¹⁴⁾。言葉を棄てて内的表象によって構成される表象的世界像につけ、という主張を読み込むべきではない。同時代の学問論の言説の中に置いてみた場合、単純観念という術語が伝えているメッセージは、内面的な絶対確実性に還れという〈哲学〉とは関係ない⁽¹⁵⁾。単純観念こそが信頼できるということは、すなわち、理論についての論争に時間を浪費せずに実験室に入って実験や観察に取り組みなさいという勧めだったわけである。

現代の読者が、所与としての単純観念という哲学的装置に関して自然に連想してしまうような〈心的内在としての現象的世界〉という捉え方は、ロックにはまったく不適切である。すでに確認したように、心の中から外界へ越え出ることが重要課題であるという表象主義に伴う問題設定を見て取ってしまうのは、読者の思いこみに基づいており、ロックのテキストには反している。そしてロックのテキストは、同時代の実験主義科学の運動を背景とすれば、実地経験に基づいた知識の信頼性がいちばん高いという当たり前の主張を述べているまでである。

5・3 観念説の原型に関する提言

17世紀後半のイングランドという歴史的環境に置いて見直してみると、ベネットが知覚ヴェイル説と名づけて批判したような傾向は、ロックの観念説にはおよそ当てはまらないことが分かる。だが、たとえこの歴史的文脈からのロック像が承認されても、ロックが次のように主張していた事実は残る。すなわち、観念とは心の中であってその持ち主だけに接近を許す内的対象であり、われわれが知覚するときに対象とするのはそのような心的内在としての観念だけなのである。

すると、知覚ヴェイル説は、潜在的にはロックの考えの中にひそんでいと主張したくなるかもしれない⁽¹⁶⁾。結局、ロックは〈心の中から外へ〉という課題にはっきりとは気づかなかただけなのであって、深く考えれば、当然知覚ヴェイル説が指摘している困難にぶつからざるをえなかったはずである、という批判が可能に見える。つまり、観念が心的内在であるのなら、外的対象との関係付けをどうやって確保するかという難問は、ロックが気づいているかいないかにかかわらず、成立してしまうのだ、という批判である。さらに言い換えれば、

観念という近世哲学の基本術語は、〈心の中から心の外へどうやって越え出るのか〉という問題設定を必然的にとまなうものなのだ、ということでもある。こういった批判の筋道は、強くデカルトやバークリーの観念説に影響を受けていると思われる。ロックの観念説が展開される経路を、歴史的脈絡を重視してたどってみれば、この批判は当たらないことが分かる。

私見では、観念説の根本的主張は次の二つである。

主張1 思考の対象は心の中の対象、すなわち観念である。

主張2 観念のうちで、ある観念は存在者を正確に表現している。

この図式は、デカルトにもロックにも共通しており、違っているのは、どういった観念が存在者を正確に表現しているかという点である。この違いは、知識とは何かという問題に対するそれぞれの哲学者の立場に由来する。つまり、哲学者にはそれぞれ知識とはこれだという原体験があって、その知識体験の内実と結びついている観念を、存在者の正確な表現となっている観念として措定する、というように考えられる。

デカルトの場合、知識体験は数学だった。だから、数学の観念こそが、存在者の正確な表現としての観念であると、神の誠実を援用して証明されねばならなかった。デカルトの形而上学の目的は、数学の生得観念の根拠付けである。一方、ロックの場合、われわれがすでに見ておいた当時の歴史的文脈から考えるならば、実験と観察の体験こそが知識についての固有の原体験であったと考えられる。だから、ロックにあっては、感覚の単純観念こそが、存在者の正確な表現としての観念であるとされねばならなかった。そしてロックはそう措定したのである⁽¹⁷⁾。

ロックは、知覚ヴェイル説が彼に帰するように、感覚の単純観念が外界から原理的に切り離された心的内在にすぎないなどとは一度も言っていない⁽¹⁸⁾。言い換えれば、ロックは感覚的経験に関する側面では懐疑論をほとんど問題にしていなかったのである。感覚のレヴェルで〈心の中から心の外へどうやって越え出るのか〉という問題は、数学的自然学の基礎付けを目指し、感覚を学問から放擲すべく方法的懐疑を遂行した後初めて現れる。感覚の単純観念こそ信頼できる外界の情報源であるという知識の原体験を持っているロックのような哲学者が、デカルトの方法的懐疑を受け入れたはずだと想定する方がどうかしているのである。

もちろんロックは感覚への懐疑論を知ってはいたが、その解決法は知識の実用性 (usefulness) に立脚するものである⁽¹⁹⁾。実用性を重視し、実験と観察に基づきつつ、個々の事例に即して考える、というベーコン主義的知識観が、哲学的言説の場全体における観念説の使われ方を規定している。平たく言えば、実験や観察の核心部分を所与としての単純観念で捉えるが、そこにもし懐疑論が疑義を差し挟むなら、知識の実用性の重視というベーコン的理念が援軍としてやってきて、懐疑論を撃退するのである。

ロックは、デカルトとは全然ちがう知識体験の上に「観念の道」を築いた。近世哲学の固有の装置としての観念説は、じつは、観念説を採用するそれぞれの哲学者の知識観の保護監察下

にあると言ったほうがよい。デカルトもロックも観念説を採用していると言えるならば、観念説という哲学的言説装置の共通の骨格は、先にも述べたように、

主張1 思考の対象は心の中の対象、すなわち観念である

主張2 観念のうちで、ある観念は存在者を正確に表現している

という二つの主張にまとめるしかないだろう。ここに知識観としてデカルト主義を適用するかベーコン主義を適用するかに応じて、主張2が指定する観念の部類が変わる。ベーコン主義的知識観を採れば、方法的懐疑や感覚への懐疑論は観念説の自然な論理的帰結ではなくなるのである。

6 むすび

ロックが単純観念に関して念頭においていた問題は、心的内在を〈越えて〉外的世界へいかにして到るか、という問題ではなかった。所与を〈越えて〉進むと言うときロックが考えていたのは、所与としての個々の単純観念を〈越えて〉いかにして一般的で学的な知識へと到るか、という問題の方であった。ロックの結論は、自然学は蓋然的にとどまるというものであったが(4-3-26, 4-12-10)、これはまた、さまざまな実験を組織的に手分けして遂行し、なんとかして説得力と説明力のある自然理解の理論を得ようとしながらも、理論的独断にはとても用心深かったロンドン王立協会の実験科学者たちの傾向と合致するものである。

日常経験を振り返ってみれば、知覚経験が外的世界について信頼できる情報を与えるという立場に欺瞞や難点があるとは思われない。だが、実験や観察のデータから理論の見地へとどうやったら進むことができるのか、という問題には特有の難問が数多くひそんでいる。感覚への懐疑は疑似問題かもしれないが、データと理論の関係という問題は真正の問題である。ロックが問おうとしていたのは真正の問題の方である。

注

- (1) 本論文は、1991年8月から1993年1月までの在外研修期間中の研究成果の一部である。例外的な長期にわたる研修を承認して下さった名古屋大学文学部教授会と、筆者の不在中の職務をこころよく肩代わりして下さった哲学科の同僚諸氏とにこの場をかりて心から感謝したい。この在外研修は、日米教育委員会フルブライトプログラムとR・K・メロン財団の援助に基づき、1991年9月から1992年8月までピッツバーグ大学科学哲学センターで、1992年9月から1993年1月までプリンストン大学哲学科で、それぞれ客員研究員として研究に従事する機会を与えられることによって成立したものである。物心両面にわたる援助をして下さった両機関、研究の便宜を与えて下さった両大学に深く感謝したい。また、ピッツバーグ大学とプリンストン大学での研究交流から、筆者は本論文の内容に関わる多くの示唆を得た。なかでも筆者の草稿を読んで丁寧な批判を与えてくれたロジャー・ウルハウス (Roger Woolhouse) はじめ、着想にコメントを与えてくれた内井惣七、ビルミン・シュテケラー=ヴァイトホフアー (Pirmin Stekelar-Weithofer)、リチャード・ゲイル (Richard Gale)、ピーター・マッカマー (Peter Machamer)、マーガレット・ウィルソン

(Margaret Wilson) の各氏に感謝したい。また研究会等で筆者の考えを批判してくださった小林道夫、斎藤了文、横山輝雄の各氏にも感謝したい。

- (2) 「ベーコン主義的知識観」として筆者が念頭においているのは、(1) 知識が実際に役に立つことを重視する実利的知識観 (utilitarianism)、(2) 実験と観察を知識獲得の拠り所とする実験主義 (experimental philosophy)、(3) 個々の経験が知識の出発点になるという帰納主義 (inductivism)、(4) 普遍的・独断的理論への懐疑論 (scepticism) といったことである。これらの考え方は第5節に引用した17世紀人の言葉から十分うかがえよう。なお、ベーコン主義的知識観の歴史的な受容のあり方については、Perez-Ramos [1988] pp. 7-31 が参考になる。
- (3) 本論文での筆者の主張は、決して、ロックの観念説がベーコン主義的知識観を自覚的に〈基礎づけて〉いる、というようなことではない。そうではなくて、筆者が示唆したいのは、むしろ逆に、ロックの言説が同時代のベーコン主義的知識観の枠組みの内側で(無自覚的な影響の下に)形成されていると考えられる、ということである。また、本論文には、ベーコン主義的知識観が現代の科学哲学的観点からして支持できるものだ、というような含みもない。関心は、あくまでも、17世紀後半のイングランドというロックの身近な環境を重視するとロックの言葉がどう読めるか、ということに向かっている。ロックの哲学は、デカルト哲学とロンドン王立協会の実験主義科学活動の両方に立脚している。従来、哲学史家によってデカルトからの影響は多く取り上げられてきた。ロンドン王立協会からの影響の方は、微粒子説や一次性質と二次性質の議論に関するロバート・ボイルからの直接的影響を除けば、ほとんど無視されている。この関心の偏りはロックの知識論の正確な理解を妨げてきたと思われる。筆者は、個別的な教説に関わるロバート・ボイルからの影響以外に、ロンドン王立協会の科学イデオロギーそのものがロックに大きく影響しているのではないか、という見通しを持っている。なおロックがベーコンに深く影響を受けているということについては、Neal Wood [1975] が参考になる。
- (4) 『人間知性論』からの引用は、文献表にあげたオックスフォード版の巻-章-節の番号で示す。2-1-24 とあるのは、第2巻第1章第24節のことである。訳文は、基本的には拙訳であるが、岩波文庫の大槻春彦訳を参考にさせていただいた。
- (5) 感覚の単純観念と外的実在の関係をめぐる問題は、ほとんどのロック解釈者が一度は著作の中で触れる問題であるから、ここに該当文献を列挙することにはあまり意味がない。文献に関心を持つ読者には、Magaret Wilson [1992] が、一次性質/二次性質の区別と外界との関係とをめぐるロック解釈の歴史的移り変わりを立ち入って考察しており、17世紀の知覚論の解釈をめぐる多数の文献のみごとな摘要として非常に役に立つと思われる。
- (6) なお、ロックは、われわれの外的世界を指示しようとするときは "without" を用いる。以下のような用例が典型的に示している。そして、ここには懐疑のかけらも無い。
- ”Tis therefore the actual receiving of Ideas from *without*, that gives us notice of the Existence of other Things, and makes us know, that something doth exist at that time *without us*, which causes that Idea in us, though perhaps we neither know nor consider how it does it: 4-11-2 ital. add.”
- (7) 17世紀のイングランドにおける言語と知識の問題は、R. F. Jones [1932], [1982] が詳しく取り扱っている。
- (8) 筆者の理解では、デカルト由来の観念説を知覚過程の記述に用いることでロックが意図しているのは、知覚表象と外界との切り離しては無い。むしろ、心の中の観念は〈他の知識を前提しないで〉直知されるという特徴と、知覚は端的に外から〈与えられる〉情報であるという特徴とを重ね合わせて、感覚的所与は他の知識を前提とせず推論なしに認知される、という主張を導きだそうとしていると考えられる。すなわち、観念説の心理的側面を適用することによって、他の知識言明群の

体系から経験的知識の基礎を〈所与〉として切り離すことが意図されているのである。歴史的に言えば、経験をアリストテレス的な知識体系から切り離すことが意図されたのであった。この点については拙論 [1988] [1992] を参照していただければ幸いである。所与概念のこのような解釈は、センスデータ論の批判的分析の中で W. Sellars [1956] が示している。Sellars [1963] chap.5 p. 132ff. 154ff. などを参照のこと。

- (9) この点に関しては、Hunter [1981] chap. 4 Merton [1978] p. 61, pp. 76-79, p. 85, pp. 137-159, Jones [1982], Shapin and Schaffer [1985] などを参照されたい。17世紀後半のイングランドにおいて実験科学という新しい学問のイデオログがフランシス・ベーコンだったということは、科学思想史の分野では広く受け入れられている見方である。17世紀人の言葉としては、Boyle [1663] の Part 1, や Sprat [1667] を参照のこと。ただし、この時代のベーコン主義と言われる立場とベーコン本人の思想の違いには注意が必要である。たとえばロンドン王立協会のメンバーには仮説を用いた探求の価値がはっきり理解されていた。注(11)参照。
- (10) ピューリタンの科学思想に関しては、Merton [1978] と Jones [1982] が基本文献である。教育に関わる側面では、前者の pp. 27-31, pp. 68-71 後者の chap. 5 などを見よ。
- (11) Sprat [1667] p.31, p.257 などの箇所に仮説使用のはっきりした是認と勧めとがある。同書 pp. 254-6 には、ロンドン王立協会で話題に登った議論 (discourse) や仮説 (hypothesis) が列挙されている。また、Boyle [1663] p.185 では、「自然哲学の諸原理 (the principles of natural philosophy)」が「それなしでは……より包括的な理論 (a more comprehensive theory) に達することができない」という意味で不可欠であることが述べられている。歴史家の言としては Hunter [1981] p.21, p.54 などを参照のこと。
- (12) Hunter [1985] を参照のこと。
- (13) Harrison and Laslett [1965] を見よ。
- (14) 筆者は、たんなる感覚的所与である単純観念の教説が、実験や観察といった複雑な操作の過程を〈基礎づけ〉ているなどと言いたいわけではない。知覚経験が外界の情報を信頼性を備えたかたちで伝えているという考え方と、実験や観察が正当な科学的探求の方法であるという考え方とは、「われわれ自身の経験がよりよく教えてくれるのに、どうして古代人の権威に服さねばならないのか (17世紀半ばの天文学者ジェレミー・シェイカリーの言葉 Jones [1982] p.123 より)」という同時代の精神を共有している、と言いたいまでである。歴史的には、実験や観察が知識を生産する正当な活動であるという主張は、複雑な社会的広がりを持った多面的な科学者の活動を通じて徐々に受容されていったのであった。この点に関しては、Shapin and Schaffer [1985] を参照されたい。
- (15) この点に関しては、注(8)を参照されたい。
- (16) P・アレクサンダーは、ロックが外界を知覚不能にってしまったという知覚ヴェイル説的解釈を受け入れない (Alexander [1985] pp. 100-104) のだが、それでもなお、心は「観念しか知覚しない 4-4-3」というロックの言を知覚ヴェイル説を支持する意味あいをもった言葉であると考えている (Alexander [1985] p. 187)。同様の考え方は、富田 [1991] にも見られる。
- (17) 念のために言っておくと、デカルト的な学問観や知識観を採るならば、感覚的経験は学問からまず放擲されるべきであるから、感覚の単純観念が外界の正確な情報を伝えるなどという措定は許されない。だが、ベーコン的な学問観や知識観を採るならば、個々の経験こそ学の基礎であり、その意味で、感覚の単純観念が外界の正確な情報を伝えると措定しなければならない。ただし、筆者はデカルトとベーコンを対立的に捉える古い通念を支持しているのではない。デカルト本人はベーコンを高く評価していたし、17世紀人にとってはデカルトとベーコンはいずれも反アリストテレス的な新科学の熱烈な擁護者・推進者として同じ陣営に属すといってよかった。とはいうものの、カリ

- レイ＝デカルト的な数学的自然学とイングランドの実験科学との間には無視できない学問観知識観の違いがあったことも確かである。E. A. バート [1988] を参照のこと。
- (18) 典型的なのは、第4巻第4章第3節から4節にかけての議論の運びであろう。「心は自分の持つ観念以外の何も知覚しないのに、どうやって、事物そのものに観念が合致すると知ることができるのだろうか 4-4-3」という疑問を立てて、ただちに、単純観念は「必然的に、自然なやり方で事物が心に作用して作り出した結果でなければならない 4-4-4」と主張する。2-30-1,2, 2-31-1,2, 2-32-14 などでも論証抜きのやり方で単純観念の実在性、十全性、真理性が結論されている。
- (19) ロックが懐疑論を知識の実用性によって無意味化しようとしていることについては、4-2-14, 4-11-3,8, などを見よ。

文献表

- Alexander, Peter [1985]
Ideas, Qualities and Corpuscles : Locke and Boyle on the External World, Cambridge Univ. Press
- Bennett, Jonathan [1971]
Locke, Berkeley, Hume, Oxford Univ. Press
- Boyle, Robert [1663]
Some Considerations touching the Usefulness of Experimental Natural Philosophy, The Works of Robert Boyle, Vol.2, pp.1-255 [1772] (reprinted by Georg Olms, 1966)
- バート, E. A. (Burt, E. A.) [1988]
『近代科学の形而上学的基礎』 平凡社
- Harrison, John, and Laslett, Peter [1965]
The Library of John Locke, Oxford Univ. Press
- Hume, David [1739]
A Treatise of Human Nature, Second Edition, with text revised and notes by P. H. Nidditch, Oxford Univ. Press, [1978]
- Hunter, Michael [1981]
Science and Society in Restoration England, Cambridge Univ. Press
- Hunter, Michael [1985]
The Royal Society and Its Fellows 1660-1700, The British Society for the History of Science
- Jones, Richard Foster [1982]
Ancients and Moderns : A Study of the Rise of the Scientific Movement in Seventeenth-Century England, Dover Pb. Inc. (この Dover 版は、1961の The Washington Univ. Press による改訂版の再刊である。なお第一版は1936年に同大学出版から発行された。)
- Jones, Richard Foster [1932]
'Science and Language in England of the Mid-Seventeenth Century', *The Journal of English and Germanic Philology*, Vol. XXXI, 1932, pp.315-331
- Locke, John [1689]
An Essay Concerning Human Understanding, edited by P.H.Nidditch, Oxford Univ. Press, [1975]
- Locke, John [1990]

- Drafts for the Essay concerning Human Understanding and Other Philosophical Writings*
vol.1, edited by P. H. Nidditch and G. A. J. Rogers, Oxford Univ. Press
- ロック, ジョン (Locke, John) [1972~1977]
『人間知性論 (一) ~ (四)』岩波書店
- Mandelbaum, Maurice [1964]
Philosophy, Science and Sense Perception, The Johns Hopkins Univ. Press
- Merton, Robert K. [1978]
Science, Technology and Society in Seventeenth-Century England, Humanities Press, (この Humanities Press 版は, Osiris, Vol IV, Part 2, 1938 に掲載された論文の再発行である。)
- Perez-Ramos, Antonio [1988]
Francis Bacon's Idea of Science, Oxford Univ. Press
- Sellars, Wilfrid [1956]
'Empiricism and the Philosophy of Mind' *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*
Vol. 1, edited by Feigl, H. and Scriven, M., Univ. of Minnesota Press
- Sellars, Wilfrid [1963]
Science, Perception and Reality, Routledge and Kegan Paul
- Shapin, Steven and Schaffer, Simon [1985]
Leviathan and the Air-Pump, Princeton Univ. Press
- Sprat, Thomas [1667]
The History of the Royal Society of London, edited with critical apparatus by Cope, J. I. and Jones, H. W., published by Washington Univ. Press [1951]
- 田村 均 [1988]
「ジョン・ロックと微粒子説」『自然観の展開と形而上学』所収 井上庄七, 小林道夫 編
紀伊国屋書店
- 田村 均 [1992]
「『観念』という装置 ——ジョン・ロックとステイリングフリートの論争から——」『理想』648号 pp.65-76
- 富田恭彦 [1991]
「ロックにおける経験的対象と物自体——『知覚ヴェール説』的ロック解釈に対する批判の試み——」『思想』787号 (1991. 1) pp.101-116
- Wilson, Margaret [1992]
'History of Philosophy in Philosophy Today ; and the Case of the Sensible Qualities',
The Philosophical Review, Vol.101, No.1, (January 1992) pp.191-243
- Wood, Neal [1975]
'The Baconian character of Locke's Essay', *Studies in the History and Philosophy of Science*, vol. 6 (1975) no.1, pp.43-84